

我が人生とアーカイブズ、  
これまでとこれから  
—記憶にたどりつく企業史料—

2023年3月31日  
企業史料協議会副会長  
阿部 武司

◆ 思い出に残るアーカイブズ、これまでとこれから

- 経営史研究者として、どのような資料に接し、それをどのように利用してきたか？
- 使える、役立つビジネスアーカイブズとはどんなものだったのか？
- お世話になった企業経営者や資料管理者（アーキビスト）たち

# 私の若いころの研究について（1）

- 私は東京大学経済学部学生の時、近代日本経済史研究を志した。
- 1977年東大大学院経済学研究科第2種博士課程進学
- 1982年東大社会科学研究所助手
- 1985年筑波大学社会科学系講師
- 1988年大阪大学経済学部助教授
- 以上20歳代半ばから約10年間の若いころには次の仕事に力を注いだ。
  - （1）戦間期（WWI～WWII。大正・昭和戦前期）の日本綿業、とくにその中小企業部門である産地織物業の実証研究。当初対象とした産地は大阪府泉南、兵庫県の西脇を中心とした播州
  - （2）朝倉每人（富士瓦斯紡績→第二富士電力→日産自動車→自動車統制会）および和田豊治（富士瓦斯紡績社長、「財界世話役」という戦前の財界人2人の日記の翻刻

## 私の若いころの研究について（2）

- （1）については、①山口和雄先生に始まり高村直助、石井寛治両先生等に継承されていた産業金融・流通史研究、および、②当時東大で高度に展開していたマルクス経済学宇野理論、その中の宇野弘蔵－大内力－柴垣和夫・山崎広明等と継承された日本産業史分析、という2つの大きな流れを継承。とくに山崎・高村・石井の3先生から直接ご懇篤な指導を賜りつつ、進めた。
- 成果：拙著〔1989〕『日本における産地綿織物業の展開』

## 私の若いころの研究について（3）

- （2）は恩師中村隆英、伊藤隆両先生のお勧めにより、文学部国史学科等出身の友人たちとの共同作業。成果：①阿部・大豆生田・小風編〔1983-1991〕『朝倉每人日記』全6巻、②小風・阿部・大豆生田・松村編〔1993〕『和田豊治日記』。
- 史料としての日記：原敬、西園寺公望の秘書・原田熊雄など政治関連の日記は政治史研究には不可欠。経済界関連でも、保険業の平尾釭三郎の日記などが公刊されているが、政治関連に比べれば少ない。日記の執筆者は、単なる備忘録にとどまらず、後世の人々に日記が読まれることを期待ないし意識していることが多いようだ。そのため自分に都合の悪いことを書いていないのが普通。また重要なことがさりげなく書かれている場合も多い。史料としては、そうしたバイアスに注意して読む必要。

## 当時におけるアーカイブズとの関係（1）

- 当時、企業アーカイブズとの関わりは殆どなし。大学院1年目で柴垣和夫教授の日本産業に関する授業での口頭報告のため、丸の内の三菱重工本社で社内資料を閲覧・複写させてもらった程度。
- 当時私が使用していた資料は（1）では①統計資料、そして②多くの場合、個人が所有する、和紙に墨書された文書。（2）も個人が所有する、同じく和紙に墨書された日記（補足的に、手書きの書簡や回想録）。今から40年余り前の当時、近代日本経済史の分野では、そうした資料を駆使した分析はまだ多くなかった。その一因：当時はPCが普及していなかったどころか、コピーが1枚50円位。大量の資料複写にはマイクロフィルム撮影が不可欠。

## 当時におけるアーカイブズとの関係（2）

- 資料の所有者との良好な信頼関係の構築が何よりも重要。個人が所蔵する資料の閲覧に関してはこの点は今でも同じ
- ただ、個人が所蔵する資料を、所有者が地方自治体の歴史編纂室や大学に寄贈ないし寄託することもそのころからかなりあり、私もそうした施設のお世話をしばしば受けた。岸和田市史編纂室、西脇市郷土資料館、関西学院大学産業研究所など。

# 1990年代ごろの研究活動（1）

- 大学教員の仕事：当時は、まず研究者であるべしとされていた。好き嫌いにかかわらず大抵の教員は教師にはなる。齢を重ねるにつれ、行政（大学運営）にも関わるようになる。
- 研究に限ってみても、個人研究だけではなく、国内外の共同研究、学際研究、さらには産（官）学連携、と様々な立場の人々との知的交流が増えることが多い。またある程度は増えるのが望ましい。∴「専門バカ」防止。
- 私も阪大に赴任後、そうした研究の新たな広がりを本格的に体験。Cf.助手・講師の頃にも、大学の枠を超えた研究会や学会を通じて、他大学の主に経済史研究者から啓発。
- 以下、ビジネス・アーカイブズに関連する経験のみ紹介。



## 1990年代ごろの研究活動（2）

- （1）紡績企業史研究会。私が阪大に赴任したころ、バブルの最中。また日本の産業革命（1880年代半ば、または明治20年代に綿紡績と鉄道が牽引）から100年＝大手紡績各社が100年史を相次いで出版。それを機に同僚の宮本又郎先生が、1989年経営史学会夏季シンポジウムを組織。そこで、鐘紡、東洋紡、クラボウの各社史の編纂に携わった企業の方々と、繊維産業史を専門とする大学教員が各社社史の合評会。
- この企画を契機に、以後年に数回、企業アーキビストと大学教員とが研究を発表し合う「紡績企業史研究会」が発足。私は、長いことその世話役を務め、阪大を去る時に神戸大学経営学部  
の平野恭平氏（4月より甲南大学）に後を託した。この研究会を通じて、企業アーキビストとの交流が本格化。

## 1990年代ごろの研究活動（3）

- （2）社史執筆：

①社内資料『東京海上最近10年史』（非公開。日本経営史研究所編〔1979〕同社100年史に続き1980年代を対象）。

②北陸地方電気事業100年史編纂委員会編〔1998〕『北陸地方電気事業100年史』第2章。

以上をともに日本経営史研究所の依頼で執筆。

## 1990年代ごろの研究活動（4）

別に、宮本又郎先生経由で

③大阪工業会編〔1994〕『大阪工業会80年史』第8-9章

④関西電力50年史編纂事務局編〔2002〕『関西電力50年史』創立前史第2章および本史第3章

⑤東洋紡株式会社社史編集室編〔2015〕『東洋紡130年史』（宮本先生とともに監修）

を執筆。

これらの仕事を通じて、様々な業種の企業アーキビストと知りあいになれた。

## 1990年代ごろの研究活動（5）

- （3）外国人との共同研究：主なものとして

①英国ランカシャー地方在住のDavid.J.Jeremy、Douglas A.Farnie両先生をはじめとする経営史研究者+産業技術史家・中岡哲郎先生を中心とする経営史・労働史など大阪市立大学グループとの1990年代を通じたプロジェクト。成果：D.A.Farnie et al., [2000] *Region and Strategy in Britain and Japan*.

②アメリカ・ボストン市を活動拠点とする経営史家W.Lazonickと産業技術史家W.Mass+東大・和田一夫と早大・宮島英昭の両氏を中心とする'Indigenous Innovation and Industrialization: Organizational Learning in Cross-National Perspective'と題する、1993年に開始した3年のプロジェクト。

## 1990年代ごろの研究活動（6）

- 外国人との共同研究の経験のうち、英米における公共および大学の図書館、博物館、文書館をしばしば見学ないし使用できたことは重要。
- （例）英国LancashireのPrestonにあるLancashire Record Office（現在はLancashire Archives）に1992年8月に何度か通った。同施設は産業革命期以来の綿業関連の資料の宝庫。戦前の日本の紡績会社LancashireのOldhamにあったPlatt社という紡績機械メーカーから三井物産を通じて多数の紡機を輸入。その取引記録は東京の三井文庫にも殆どないが、ここには有り。世界の経済史家が利用。私はまた、戦間期に関するBarber-Lomax Collectionを閲覧・複写。そこに通っていたら、職員がPlatt Collectionの目録をプレゼントしてくれた。複写依頼した資料はその後、丁寧にコピーされて無事日本に到着。

## 1990年代ごろの研究活動（7）

- 以上のほか、2度にわたる通商産業政策史および豊中市史の執筆で官庁のアーカイブズにも世話になったが、省略。
- 最後に個人研究。
- その後も、産地綿織物業の研究は続行。対象とする産地も愛媛県今治、大阪府泉北、広島県の福山市を中心とする備後と増えたが、対象時期も徳川期や明治期に拡大。また、織物産地だけでなく大企業部門である紡績会社に関する研究を開始。
- 成果は、①山崎・阿部〔2012〕『織物からアパレルへー備後織物業と佐々木商店』、②阿部〔2022〕『日本綿業史』。
- こうした広がりには、すでにみた紡績企業史研究会や外国人との共同研究から受けた刺激が大変大きかった。

## 1990年代ごろの研究活動（8）

- そのなかで、綿紡績に関する世界的にも著名だった日本紡績協会所蔵資料（大阪備後町の綿業会館に所蔵）にたびたびお世話になったが、20世紀中には紡績企業については研究が進まなかったため、本格的利用に至らなかった。
- しかし、2000年に日本紡績協会は大阪大学附属図書館にその所蔵資料のほとんどを寄贈。私はこのコレクションを受け入れる際の窓口となっただけで、この資料が阪大に移管された後に大いに活用しなばしば訪問。
- ただ、図書館は書籍・雑誌しか扱えないうえ、一次資料は経済学研究所の蔵書（：アーカイブ）に在り、内外なく私蔵が同業資・室者（当）を成してDVD版の「日本紡績協会・在」を2012年より市販。

## 21世紀における企業アーカイブズと私（1）

- 紡績企業史研究会、社史執筆、外国人との共同研究は、私の研究の幅を広げてくれたばかりではなく、企業アーカイブズおよびビジネス・アーキビストの方々との交流の機会を与えてくれた。
- 21世紀初めの10数年間には、2000年に難病患者となり、それ以後にはさらに国立大学「改革」（具体的には大学院生の数、そして学内行政の激増）につきあわされる。よって、研究に割ける時間は大幅に減少。
- しかし他方で、2009年1月から4年間、経営史学会会長。2011年春からは日本経営史研究所評議員および企業史料協議会副会長。2010年以降には世界経営史会議（World Congress of Business History）のInitiative Groupの一員。21世紀には企業アーカイブズおよびビジネス・アーキビストとの交流の機会が、以前よりも増加。



## 21世紀における企業アーカイブズと私（2）

### ・最近の例

- ①2018年3～5月開催の帝国データバンク史料館の特別展「地場“讚”業—伝統と革新の軌跡—」の監修を担当し、館長（当時）の高津隆氏、学芸員の上山佳代・福田美波両氏等のお世話を受けた。
- ②2015年春より倉敷の大原家の委託（猪木武徳先生経由）で、戦後の経営者・大原總一郎が1949～68年まで大学ノート100冊の残した日記の翻刻。その際、大原家資料を管理している有隣会の水島博氏のお世話になっている。
- ③京セラの稲盛ライブラリーが2020年以來運営している稲盛和夫研究会に、本年4月からそのアーカイブ研究分科会に加えていただくことになった。



## 21世紀における企業アーカイブズと私（4）

- 2019年末、玉川・平井・阿部の3人が渡英し、HH社が作成した明治期の紡績企業の工場の、動力関連を明記した機械配置図、およびヒック社が建築家に依頼して作成されたとみられる工場設計の図面を発掘。日本の近代的紡績会社のパイオニアといわれる大阪紡績（現・東洋紡）三軒屋工場第1～3工場の図面を、取り急ぎ写真撮影。成果：産業技術史学会年会講演要旨〔2020〕。
- しかし、調査はコロナ禍により中断。本年3月に平井、中岡両氏の渡英により、ようやく再開。

## 思い出に残る方々（1）

- 企業アーカイブズの私にとっての効用：研究に必要な資料をすぐに閲覧させてもらえること。不明な点に適切にご教示いただける優れたアーキビストが常駐していること。
- 研究上お世話になった企業経営者やアーキビスト：あまりに多数で、列挙不可能。しかし以下で、敢えてお名前をあげさせていただくが、ほぼ全員物故者。
- ①織物産地：所蔵資料の閲覧を快諾して下さった大阪府貝塚市の帯谷正次郎氏、広島県福山市新市町の佐々木淳雄氏。お二人とも個人企業の経営者。

## 思い出に残る方々（2）

- ②紡績：綿紡績企業は戦前には三井・三菱などの大財閥を肩を並べる存在。紡績大手企業は社史だけでなく歴代社長の立派な伝記も刊行。戦前から昭和20年代ころまでに書かれた紡績社史は、豊富な社内資料を駆使し、戦後の悪く言えばパターン化された社史とは異なって生き生きとした自由な記述に満ちている。これは当時の紡績企業さらに業界団体の大日本紡績聯合会（紡聯。戦後は日本紡績協会）が、深い学識を持つ人材の宝庫であった事情による。私もそうした方々の最後の世代から大いに啓発された。

## 思い出に残る方々（3）

- 日本紡績協会専務理事を歴任された有田圓二氏と片岡衛氏、倉敷紡績元専務取締役の本郷公（ただし）氏には紡績企業研究会でお世話になる。有田氏の深い学識は圧倒的。片岡・本郷両氏は、研究会の運営や講師の紹介など熱心に支援。片岡氏は、元全織同盟会長の滝田実氏のインタビューを設定（『日本紡績月報』に記録が掲載）。
- 研究会の主要メンバーであった東洋紡の村上義幸氏は同社の歴史に関する生き字引。私は同氏のオーラル・ヒストリーを『大阪大学経済学』に5回連載で掲載。村上氏は、同社『130年史』執筆の際にもお付き合い。クラボウの百年史の編纂にあたられた大津寄勝典氏は、大学院での私の学生にまでなってくれたが、2004年に博士論文を『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』という立派な研究書として上梓。大原孫三郎と倉紡について多数のご教示を私も得た。

## 思い出に残る方々（４）

- 紡績企業史研究会に参加されていた住友史料館副館長の山本一雄氏も『住友本社経営史』という大著を公刊。
- ③社史：東洋紡村上氏については既に述べた。東京海上の三浦尚、入澤三徳の両氏は、保険について無知であった私の理解を深めるようご丁寧な指導。大阪工業会元専務理事の大谷國明氏が大阪経済界に関する該博な知識を惜しみなく与えて下さる。

# 補足：オーラル・ヒストリーについて

- 現在オーラル・ヒストリーが盛ん。契機は21世紀初頭の御厨貴氏による宣伝か？
- しかし、社会科学の世界では戦前以来の伝統（土屋喬雄氏の鹿島紡績所の研究、宮本又次氏の人力車の研究など）。戦後も安藤良雄氏などが政財界人とのインタビューを精力的に実施。政治史分野のパイオニアは伊藤隆先生だろう。Ref.中村・伊藤・原〔1972-1973〕。
- 私の恩師山崎広明先生は、資料が残りにくい中小企業の実証研究を進めておられたからであろうか、すでに1960年代から盛んに聴き取りをされ、成果を論文に活用。私も、研究の出発点からOHはごく当然のこととして活用。1989年の処女作を参照。
- 現在、社史や大学史などを完成する際にもOHは不可欠。
- ただ、OHには重要な限界があり＝人間の記憶に依存。人間は経験を自分に都合よく作り変えてしまう？可能な限り裏を取る必要あり。



## ◆ アーカイブズを創る、守る、残す

- 大阪大学アーカイブズ創設の理念
- 大阪大学アーカイブズ設立に至る苦労と課題
- 大学アーカイブズへの期待



## 大阪大学アーカイブズの創立理念（2）

- 従って私は、アーカイブズ設立の理念などという高邁なものを持って出発した訳ではなかった。
- 当初は、大学史資料室のようなものを作ればよいのだろうと  
思っていたのだが、前記のアーキビストの方々の話を聞いているうちに、（1）大学に保存されている古い資料とともに、  
（2）学内で日々作成されている書類のうち、重要なものを選別した上で整理・保存することも必要であることに、まもなく気づいた。
- 2005年1月文書館（仮称）設置検討ワーキングを担当副学長のご支援により設置し、そこで、上記の考えを委員に説いて賛同を得、専門のアーキビスト1名の採用も承認。

## 大阪大学アーカイブズの創立理念（3）

- 2006年7月、文書館設置準備室設置。専任講師菅真城氏をアーキビストとして迎える。以後、菅氏と対話を重ね、2009年6月公布（施行は2011年4月）の公文書管理法に基づく組織とする決意を固めた。
- ここで最大の目的が、事務方が現用文書として使ってきた法人文書のうち保存期間が過ぎたものを、あらかじめ定めた受入れ方針に基づいてアーカイブズに移管し、大半の文書を廃棄したのち厳選された文書を整理・保存・公開することとなった。これが創立理念の確立といえるのではないか？
- 紆余曲折はあったものの、2012年10月に大阪大学アーカイブズが発足し、翌13年4月、内閣総理大臣より、公文書管理法に基づく「国立公文書館等」として指定。また、大学史資料部門も「歴史資料等保有施設」として指定。

## 阪大アーカイブズ設立に至る苦労と課題（1）

- アーカイブズ論のイロハも知らない素人に、重い課題が課されたこと自体、苦労。まず勉強が必要。ただし時間がない。そうならば基本は耳学問。アーカイブズ構築：「拙速」でよい。「功遅」はダメ。
- 21世紀初めにはアーカイブズ自体が、世間的に知られていなかった。大学でも、日々書類の作成と保管に従事している事務方の理解は比較的早く得られたが、上の役職者のほうがむしろ、必ずしもよくわかっておらず、総長の交替によって、それまでの支援から「つぶし」に転じた役職者もいた。また文系の教員の理解は容易に得られたが、理系教員の場合、困難。理解するとすぐに支援してくれた人も多かったが、「つぶし」にかかる人がいたのも事実。

## 阪大アーカイブズ設立に至る苦労と課題（2）

- 「古い資料などとおいても役に立たない」、「図書館、博物館がすでにあるのに、金のかかる、似たような施設を何故新設するのか」、「文書館が出来たところで1年間に何人お客さんが来るのか」、「準備室の顔が見えない」等が典型的批判。
- 菅氏と私は、こうした批判に対し、HPから発信するニューズレターを使って、可能な限りいちいち回答。それが思考を深めるよいトレーニングにもなった。今思えば、批判とは有り難いものだ。
- それとともに「つぶし」を防止する最良の手段は、総理大臣の指定などのような「権威のお墨付き」を得ることと知った。

# 阪大アーカイブズの今後に関して

- 文書館設置準備室は2011年4月に豊中から箕面（旧・大阪外国語大学）へとキャンパスを移動→2013年10月に大阪大学アーカイブズ。しかし、コロナ下の2021年1月には吹田キャンパスの生命科学図書館（阪大附属図書館の一つ）の一隅にさらに移転。
- 実は私はこの新しいアーカイブズを未見。だが、そもそも資料の収容能力を一つの重要な前提として内閣府の指定を受けられたにもかかわらず、大学の都合でそうした変更を余儀なくされるのは弱小部局の宿命。
- こうした望ましくない措置を防止するには、アーカイブズが本当に必要であることを大学執行部に認識させる以外なし。現在の国立大学法人では「性善説」は通用しない。
- 2031年の阪大創立100周年記念事業の柱となるべき『大阪大学100年史』の編纂に阪大アーカイブズがどれだけ貢献できるかが、発言力強化の試金石となろう。

# 大学アーカイブズへの期待

- 国公立大学のアーカイブズないし文書館では、公文書管理法に則り、歴史的資料の収集・整理・保管・公開に務めるとともに、法人文書、すなわち、保存年限が過ぎた現用文書の選別・整理・保管・公開を進めていくことが新たに加わった責務。
- 私立大学では、大学史の編纂に関わる歴史的資料の収集・整理・保管・公開を行う（大学史）資料館または資料室の設立と維持が今のところ最も重視されている。
- 今後は、上記の業務に加えて、少子化の下で存続が容易ではなくなってきた各大学の戦略・戦術に役立つ情報を即座に提供するシンクタンクの機能が国公立大学のみならず私学でも重要になるのではないだろうか？



## ◆ アーカイブズを活かし、役立て、伝えるために

- ビジネスアーキビストの役割—利用者としての視点—
- ビジネスアーキビストの役割—企業経営の視点—
- 企業が生き残るためのビジネスアーカイブズの役割と課題

## ビジネスアーキビストの役割—利用者としての視点—（1）

- 経済史・経営史研究に40数年間携わってきた私にとって、企業アーカイブズは不可欠な存在。ビジネスアーキビストは強力な supporter、advisor、mentor。
- 閲覧できる資料の目録を用意し、そこに記された番号を示せばアーキビストがただちにその資料を探し出してくれ、自由に閲覧し、必要な箇所は複写してくれる企業アーカイブズは、大部分、大企業関連の施設であって、中小企業研究から出発した私にとって当初は無縁に近い存在。
- しかし、研究を重ね、その幅が広がるとともに、その重要性は急速に高まっていった。

## ビジネスアーキビストの役割—利用者としての視点—（2）

- ビジネスアーキビストは、閲覧者が求める資料を提供するのにとどまらず、関連する他の資料まで示唆してくれると、利用者としてはまことにありがたい。
- 私の経験：東洋紡社史室で村上義幸氏と雑談している時、書架に墨書された和紙の綴を発見。村上氏が収集した、東洋紡の前身・三重紡績会社の社長・伊藤伝七が、技師長・斉藤恒三（のち社長）に宛てた書簡であることを確認。その後、古文書解読に長けた井上真里子を加えた3人でこの資料を翻刻し、学術誌に公表。これまで知られていない重要な事実を解明。思いがけない成果。

## ビジネスアーキビストの役割—企業経営の視点—（1）

- しかし、企業アーカイブズは、研究者のためにあるのではない。歴史研究者の中にはしばしばそうした考えを当然とする人がいるが、その態度は傲慢。企業アーカイブズは、何よりも当該企業のためである。
- この点に関連して、故安江明夫企業史料協議会副会長が安江[2017]で、企業史料協議会編[2013]掲載の当時の企業史料協議会理事会メンバーの諸論文を援用しつつ、
- ①企業アーカイブズにおいては、歴史資産である資料を「遺す」よりも「活かす」ことが、より重要であること
- ②企業アーキビストの基本的役割を、記録・史料の管理者から情報提供者/歴史資産活用者へと転換すべきこと
- ③資料収蔵庫や閲覧スペースは必ずしも必要ではないこと

## ビジネスアーキビストの役割—企業経営の視点—（2）

- ④アーカイブズの世界での共通規範とされている「文書公開の原則」「平等閲覧の原則」「30年原則（\*ICAが提唱した公文書の公開時期）」「原秩序尊重・出所（処）の原則（\*文書の原秩序保存）」「ICA（国際アーカイブズ評議会）倫理綱領」のうち、「原秩序尊重・出所の原則」などを除く大部分が、企業アーカイブズには適合しないこと、言い換えれば、企業アーカイブズは何よりも当該企業、さらに言えばアーキビスト自身のためにあること、
- ⑤企業ライブラリーがある場合には、ライブラリアンがアーキビストを兼ねても構わないこと
- 以上を提唱し、企業史料協議会会員に賛否両論をもたらしたことは、会員間では記憶に新しい。

## ビジネスアーキビストの役割—企業経営の視点—（3）

- 世界各国の企業アーカイブの研究を精力的に続けている松崎裕子企業史料協議会理事は、以上の安江論文も言及していた松崎[2013]で、アーカイブズへの会社経営への活用として、企業史料協議会で、従来最も重要であるとされてきた社史編纂以外にも、教育研修、経営理念継承、マーケティング、製品開発、ブランド戦略、広報宣伝、意思決定、透明性確保、コンプライアンス、説明責任、リスク管理、法務、CSR（\* Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任。最近ではSDGsやESGの方が一般的）を挙げている。松崎氏も、企業アーカイブズが社史編纂や経営史研究者のためにあるのではなく、広く当該企業の経営のためにあることを主張。

## ビジネスアーキビストの役割—企業経営の視点—（4）

- 松崎氏は、所属する公益財団法人渋沢栄一記念財団情報資源センターを拠点に、国際アーカイブズ評議会（ICA）、とくにその企業アーカイブズに関する専門部会に関係。同氏は松崎[2021]で、欧米や中国・インド・日本などのアジアの諸国の企業アーカイブズの現状を概観。
- 安江、松崎両氏の見解はまことに啓発的であり、企業アーカイブズが何よりも企業の発展のためにあり、ビジネスアーキビストは、重要な情報を掌握できるがゆえに、企業に積極的提言をなしうる重要な立場にあることを私は理解できた。

## 企業の存続のためのビジネスアーカイブズの役割と課題（1）

- 世界のうちでも、とりわけ日本において企業が現在置かれている状況はきわめて厳しい。1990年代のバブル崩壊云々よりも、バブル以前から徐々に進んでいた少子化に由来する生産年齢労働の減少が、その決定的要因、と私は考えているが、それはともあれ、今後はどう頑張っても高度成長の再現など、まずありえないだろう。
- これまでの日本の企業アーカイブズの大きな課題は立派な飾り物のような社史の編纂だったが、そもそもそうした出版物に振り向ける経費を企業が捻出するのは今後困難。
- もちろん温故知新の観点から、内容が充実した社史の刊行は今後ある程度は続くであろうし、企業アーカイブズがそれに貢献すること自体は結構なこと。



## 企業の存続のためのビジネスアーカイブズの役割と課題（2）

- しかし、企業アーカイブズの役割は、社史編纂、あるいは企画展示のみに限定されるわけでは決していない。海外の事例も参照にして、今後は、社内に蓄積された精選された資料の紹介と活用法を、ビジネスアーキビストが積極的に社内外に発信し、とくに企業の生き残りに関わる戦略・戦術に資料を役立てることが期待されよう。
- そのためには企業の経営者が、アーカイブズの意義を認識することが非常に重要。
- 近年官公庁における資料の杜撰な管理がしばしば問題となっている。安倍内閣時代の公文書の改竄、あるいは最近の裁判所の記録廃棄など。

## 企業の存続のためのビジネスアーカイブズの役割と課題（3）

- 各官庁のHPにはしばしばデジタル・アーカイブズといえるサイトがある。それらの中には、①国立国会図書館デジタルコレクション、②国立公文書館デジタルアーカイブ、③外務省の日本外交文書デジタルコレクション、④国立公文書館・外務省・防衛省共同のアジア歴史資料センター、のように優れたサイトもあるが、農水省が掲げる戦前の統計書類などは、スキャンが悪く判読できない部分が多い。また特許庁の特許・実用新案検索や財務省の貿易統計は、調べたい事項名の特定が困難なため、検索が大変。膨大な予算をつぎ込みながら日本のデジタル化が進まない一因は、諸官庁の、利用者の利便を無視した独善的なシステム設計にあるのではないか？

## 企業の存続のためのビジネスアーカイブズの役割と課題（4）

- アーカイブズの模範を提供すべき日本の官公庁の公文書管理には、改善すべき点がまだまだ多い。こうした土壌のなか、民間企業でアーカイブズの重要性をトップマネジメントに認識してもらうことは至難の技であろうけれども、それでもやはり、粘り強く実績を重ねてゆき、組織内での存在感を高めていく努力を惜しむべきではない。手前味噌ながら私如き素人でも徒手空拳で、10年がかりで阪大内にアーカイブズを創出できた。必要なものはただ強い意志と忍耐力だけだった。

## 参照文献（1）

- 阿部武司〔1989〕『日本における産地綿織物業の展開』東京大学出版会.
- 阿部武司〔2020〕『アーカイブズと私—大阪大学での経験』クロスカルチャー出版.
- 阿部武司〔2022〕『日本綿業史—徳川期から日中開戦まで』名古屋大学出版会
- 阿部武司・大豆生田稔・小風秀雅編〔1983-1991〕『朝倉每人日記』全6巻, 山川出版社.
- 大阪工業会編〔1994〕『大阪工業会80年史』大阪工業会.
- 大阪大学50年史編集実行委員会編〔1983〕『大阪大学50年史』（通史・部局）.

## 参照文献（2）

- 大津寄勝典〔2004〕『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』日本図書センター.
- 関西電力五十年史編纂事務局編〔2002〕『関西電力50年史』関西電力株式会社.
- 企業史料協議会編〔2013〕『企業アーカイブズの理論と実践』丸善プラットフォーム株式会社.
- 小風秀雅・阿部武司・大豆生田稔・松村敏編〔1993〕『実業の系譜 和田豊治日記 大正期の財界世話役』日本経済評論社.
- 滝田実〔1991〕「回想：ゼンセン同盟 黎明期の頃」（上・下）『日本紡績月報』第534－535号.
- 東洋紡株式会社社史編集室編〔2015〕『東洋紡130年史』東洋紡株式会社.

## 参照文献 (3)

- 日本経営史研究所編〔1979〕『東京海上火災保険株式会社100年史』上・下巻, 東京海上火災保険株式会社.
- 平井直樹・結城武延・玉川寛治・阿部武司〔2019〕「初期日本紡績工場の設計図面—二千錘紡績関係資料および大阪紡績会社関係資料—」『渋沢研究』第31号.
- 平井直樹・玉川寛治・阿部武司〔2020〕「Hick Hargreaves社文書で発見された初期日本紡績工場の設計図面」『日本産業技術史学会第36回年会講演要旨集』.
- 北陸地方電気事業百年史編纂委員会編〔1998〕『北陸地方電気事業100年史』北陸電力株式会社.
- 中村隆英・伊藤隆・原朗編〔1971-1972〕『現代史を創る人びと』全4巻, 毎日新聞社.

## 参照文献 (4)

- 松崎裕子[2013]「経営資源としてのアーカイブズ」(同上, 企業史料協議会編, 所収) .
- 松崎裕子[2021]「世界のビジネス・アーカイブズ概観」時実象一監修・久永一郎責任編集『デジタルアーカイブ・ベーシックス5』勉誠社, 第1章.
- 御厨貴[2002]『オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録』中公新書.
- 村上義幸・阿部武司・東口聡[2001-2002]「戦後綿紡績における労務管理(1)~(5)—労務管理者の回顧」『大阪大学経済学』第51巻第1~4号・第52巻第1号.
- 安江明夫[2017]「企業アーカイブズ論を再構築する」『企業と史料 第12集 人が語る、資料をつくる』pp.5-15.

## 参照文献 (5)

- 山崎広明・阿部武司〔2012〕『織物からアパレルへー備後織物業と佐々木商店』大阪大学出版会.
- 山本一雄〔2010〕『住友本社経営史』上・下巻, 京都大学学術出版会.
- Douglas A.Farnie, David J.Jeremy, John F.Wilson, Tetsuro Nakaoka and Takeshi Abe (eds.),〔2000〕, *Region and Strategy in Britain and Japan: Business in Lancashire and Kansai 1890-1990*, Routledge, London.